アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：シン　ヱヴァンゲリヲン　劇場版

その 14

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスそして仲間達の魂の救済

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q において、シンジは再び大きな悲劇の引き金をひいてしまった。そのことに深い絶望に瀕したシンジは第三村での温かい人間関係のなかで希望をもつ。そして綾波の死により、彼の心は動揺するが、父親との対決という新たな局面へと彼を突き動かす。この出来事は、シンジが依存してきた人間関係から離れ、自らの力で生きることの大切さを悟るきっかけとなり、心理的な成長を促す重要な転換点となる。

→それが父と対峙（エディプスコンプレックス）である。

綾波の死後、再びヴンダーに乗り込んだシンジは父ゲンドウと対峙していくこととなる。

7. シンジと父との対峙　父殺し

シンジはエヴァを通して対峙する。その中で二人はぶつかり合いながらも交流をしていく。

２）父と対峙しぶつかるシンジ

シンジとゲンドウはエヴァに乗って戦うが、シンジはゲンドウに全く敵わない。そこで、ゲンドウは「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と告げる。そこで彼が告げた意味は、現実的に父を倒すことではなく、自身の内的な父親像を乗り越え、現実で父的な存在に恐怖を抱かず、お互いを深く理解し、認め合い、対等な存在でいられるようになることである。

ここで、シンジは、「うん。父さんと話がしたい」という。この言葉には、父親の真意を深く理解したいという思いが込められている。

それはシンジの強い覚悟を示す言葉であるように感じられる。なぜなら「父ゲンドウが母のユイやゲンドウ自身に夢中でシンジ自身には関心がなかった」と

いうこれまでシンジが決して受け入れられなかった事実に直面する可能性があるからである。しかし相次ぐ喪失に心を痛めながらも受け入れ、成熟したシンジには、それを受け入れる強い覚悟を持ち、父親との関係を深く掘り下げ、自らの存在意義や父親の本当の姿を明らかにしようとしている。

3）父との対話　アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

　ゲンドウが創り出そうとする世界は、「A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界。」という理想的世界であった。それは所詮、妻ユイの死という悲しみを受け入れられない故の躁的な誇大妄想の世界である。しかしゲンドウは人間を捨てて神の存在にまでなったものの、実際は孤独で脆い存在であった。それ故に成熟したシンジがゲンドウの心に触れようとすると、身構える様に、たちまち A-T フィールドを発動してしまったと考えられる。

「A・T・フィールド？　人を捨てた、この私に？まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

と言い自分自身が起こした行動に驚いてしまう。

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し、

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに。僕と同じだったんだ。父さんも」

というが、シンジは自分の心を通じて、ゲンドウの孤独と悲しみを理解し、受け入れていく。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。

４）父の内的世界　人類補完化計画とは？

**　ゲンドウの孤独と喪失、そして人類補完計画**

　幼少期からゲンドウは人と深く関わることができず、孤独であった。ユイとの出会いはそれを変えてくれたが、程なくして彼女は亡くなってしまい、彼は深い傷跡を残した。その悲しみから逃れるように人類補論計画という壮大なプロジェクトへと突き進んでいく。この計画は、分離を拒否し、一つに融合させること

で、ユイとの再会を叶えようとする、いわば「肛門期の固着」の状態と考えられる。

ゲンドウの贖罪と成長

シンジは、ゲンドウの孤独と悲しみを理解し、彼を責めることなく、温かい眼差しを向け、受け入れていく。その中でゲンドウはこれまでシンジのことを単なる「手段」と考え、拒絶してきたが、息子を愛せない自分自身を深く悔み贖罪の念を抱き、シンジを受け入れる。

そしてミサトから託されたガイウスの槍を手にしたシンジの姿を見て、ゲンドウは息子が成長したことを実感する。つまりゲンドウは現実をようやく受け入れたのである。

シンジの姿を再認識する中で、彼は初めて、シンジを自分とユイとの息子であると受け入れ、ゲンドウは

「そうか、そこにいたのか――ユイ」

と言ったと考えられる。

ここで、ゲンドウの心性は、妄想分裂的ポジションから、抑うつ的ポジションへと変化である。彼はユイの喪失を受け入れ、シンジの中にユイの姿を重ねるこ

とで、彼はようやく心の安らぎを見出したと考えられる。

→そこで、シンジの父への思いは整理されたからか、父はトボトボと電車から降りていく。

　このことでシンジは父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づいた。父親が電車から降りたということは、もうシンジにとって強大な自身を圧倒する様な父親ではないと感じられる様になったことを意味している様に感じられる。そしてそれこそが、**シンジの心の中での父親殺しになった（父を乗り越えた）と考えられる。**

8. アスカ、カヲル、綾波の魂の浄化

　父との深い交流を経て、エディプス葛藤を乗り越え、心的にシンジは成熟したと考えられる。シンジは、その後、亡くなってしまったアスカ、カヲル、綾波の魂の救済の作業に乗り出そうとする。

　それはシンジ自身にとって、父と同じ様に彼ら彼女らと深く情緒的に関わる中で、喪の作業を成し遂げていくことである様にかんじられる。

１）アスカの場合

ここでアスカは、独白の中で自身の過去を語り始める。両親のいない孤独な世界で生きてきたという彼女の言葉は、エヴァ序の冒頭でシンジが抱いていた心境と重なる。どちらも、傷つくことを恐れ、自己愛的な殻に閉じこもっていたと考えられる。「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」という言葉は、まさにそのことを表している。

「お前バカァ？」というアスカの常套句は、一見攻撃的に見えますが、実はそう言われないように必死に努力してきた証なのかもしれない。彼女は、孤独を感じながらも、自分の弱さを認めず、常に強がって見せていたのだろう。これは、まるでヤマアラシのジレンマのように、近づきたいのに近づけず、結果的に相手を傷つけてしまう状態だったと言える。

エヴァの破で、シンジとアスカが同じ布団で寝転び、エヴァに乗る意味について語り合ったシーンがあります。シンジが「父さんに褒めてほしいのかな？」と話す言葉は、アスカも心の底で感じていたことである。認められたい、愛された

いという、誰しもが抱く普遍的な感情を、二人は共有してたからこそアスカはシンジに惹かれていったのだと考えられる。

　アスカは、どこかでシンジに救いを求めていたのかもしれない。そして、成熟したシンジが「ありがとう。僕を好きだと言ってくれて。僕も、アスカが好きだったよ」と告げた言葉、それは彼女の心の奥底にある孤独を癒やし、救ってくれた言葉だったと言えるだろう。

　そしてアスカの魂は浄化され、同時にシンジはアスカの喪失を受け入れる。二人の関係は、複雑で切なく、そして美しいものであったと言える。

２）カヲルの場合

　カヲルは、なぜシンジの幸せを願うのか。それは、彼自身がシンジと「同じ」存在だからと考えられる。「僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。」という言葉が示すように、カヲルは自身の内なる心の痛みをシンジに投影し、シンジを幸せにすることで、間接的に自分の心を癒そうとしていた。これはまさに、他者の世話をする「ケアテイカー」の心理と言える。

この関係性を断ち切るためには、シンジが自立し、カヲルの心を理解し、受け入れることが必要である。シンジが「僕が泣いても、他の誰も救えない。だから、もう泣かないよ」と告げたのは、この状況を乗り越えようとする決意の表れと言える。

一方、カヲルは「僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」と告白する。彼は、宿命の中で偽りの自分を演じ続け、孤独を感じていたと考えられる。

幼いシンジとの出会いのシーンで、カヲルは「相補性のある世界を望む」と言う。これは、自分と相手が異なる部分を持ちながらも、お互いを補い合う関係性を意味します。カヲルはケアテイカーとして完全無欠でありたがった一方で、彼自身も孤独な存在だったと考えられる。

そして、シンジにとってのカヲルの役割は終わりを告げる。シンジはカヲルの喪失を受け入れ、新たな一歩を踏み出したと言える。

３）綾波の場合

シンジ「残っているのは君だけだ、綾波」

綾波「私はここでいい」

シンジ「もう一人の君は、ここじゃない居場所を見つけた。アスカも戻ったら、新しい居場所に気づくと思う」

綾波「エヴァに乗らない幸せ。碇君にそうして欲しかった」

シンジ「うん。だから、ここじゃない君の生き方もあるよ」

綾波「そう？」

シンジ「そうだ。僕もエヴァに乗らない生き方を選ぶよ。時間も世界も戻さない。ただ、〝エヴァがなくてもいい世界〟に書き換えるだけだ。新しい、人が生きていける世界に」

　二人の背景に走馬灯のように流れる長大な物語の断片が映し出された。

綾波「世界の新たな創生、ネオン・ジェネシス」

シンジ「うん。それに、あとでマリさんが迎えに来る。だから、安心して」

綾波「そう。分かった」

シンジ「碇君、ありがとう」

　レイは右手を差し出し、シンジと握り合う。そしてその場から去う。シンジは

スタジオの中で最後の一人になった。

シンジ「やってみるよ。綾波」

ガイウスの槍を握りしめ、決意を固める。

シンジ「ネオン・ジェネシス」

【考察】

　エヴァ自体、反復が一つのテーマになっているが、この新劇場版の序から新までにおいても、当初、幼少期の母の喪失、そして父の育児放棄の中で、シンジは殻に閉じこもる様に心を閉ざしていたが、抱えられる中で徐々に成熟していく一方で、相次ぐ喪失の中で再び殻に閉じこもることを反復強迫の様に繰り返していた。そこにいつもシンジの側にいたのは綾波だった。その中で綾波はエヴァに乗ることを巡って何度もシンジの苦労しもがく姿をくり返し見てきたと考えれる。だからこそシンジの苦悩を少しでも和らげたいと「エヴァに乗らない幸せ。碇君にそうして欲しかった」と言ったのだと思われる。シンジにとってエヴァに乗るということは、父親を巡る葛藤であり、それはエディプス葛藤に他なら

ない。そしてシンジ自身も「僕もエヴァに乗らない生き方を選ぶよ。」と決意表明をしている。それは今まで父の幻影に苦しめられてきたシンジがその葛藤を乗り越え、新しい生き方を模索していく決意表明の様にも感じられる。（そしてそれは庵野監督自身のエヴァから脱していく決意表明の様にも感じられる。）

そして「ネオン・ジェネシス」の儀式が行われる。

9. さよなら、全てのエヴァンゲリオン

　シンジが「ネオン・ジェネシス」を果たそうとするために自身のエヴァの首にガイウスの槍を刺そうとする直前に、誰かの手で差し止められ、シンジは母に抱えられる様子が描かれる。それからその槍からシンジを遠ざける様するシンジの背中を押す手が描かれる。

　シンジが振り向くと綾波に似た女性の姿が映し出される。そこでシンジが気付く

シンジ「綾波？　いや、違う。そうか、この時のために、ずっと僕の中にいたんだね。母さん」

そしてエヴァが二つになり、一方が後ろから抱かれて、もう一方が両手を広げて槍を刺される準備をしてている。その後シンジに父ゲンドウが背後から母を抱き母は幸福そうな笑みを浮かべている。

シンジ「やっと分かった。父さんは、母さんを見送りたかったんだね。それが父さんの願った、神殺し」

　次々とエヴァンゲリオンをガイウスの槍で次々と突き刺されていく。

シンジ「さようなら。全てのエヴァンゲリオン」

そしてそのことが新しい世界を切り開いていく始まりとなっていく。エヴァンゲリオンは様々な老若男女や動物に変わっていき、これまで真っ白だったものが様々な色の色彩を持ち始める。

【考察】

　「エヴァに乗らない生き方」を選ぶということは、これまでの自分自身を壊していくことである。しかし自分そのものを壊していくのではなく、これまでとらわれてきた自身の内的世界に別れを告げていくことである。

　それは両親、自分という、親子の関係のなかでシンジがこれまで抱いてきた内的世界であり、周囲に対して迫害的に捉え、傷つかない様に自分の殻に閉じこもっていた彼の心性（妄想分裂ポジション）である。

　そのシンジが色々な人との出会いの中で、もがき苦しみながらも、心を開き、父と対峙し、エディプス葛藤を乗り越え、様々な喪失を受け入れ、人として成熟していく過程である。そしてそれは、綾波やアスカの喪失、およびその喪失に象徴される思春期の情緒的葛藤に伴う喪失を乗り越え、シンジが新たな人生を歩み始めたとも考えられる。だからこそ、モノトーンだったいろいろな光景が多種多様でイキイキと彩りを持ったものとして目の前に溢れてきたのだと考えられる。

そのことこそが新劇場版エヴァで言われている「ネオン・ジェネシス」である様に感じられる。

　そして、彼にとって必要のなくなったエヴァは次々と壊されていく。

　次回、今一度、これまでの新劇場版エヴァの作品を振り返りながら、その点について考えていきたいと思う。